



理解（分かった）から納得（なるほど）へ

「黒船来航、日本の人は（18）降参（53）さ」「 $\sqrt{2}$ は、1.41421356（一夜一夜に人見頃）」皆さんもよく知っている覚え方だと思います。数字の羅列を言葉に変えることで語呂合わせや音感から記憶に強く留める方法です。

昭和58年夏、私は夢と希望に溢れた受験生として、辞書を片手にひたすら机に向かっていた。運動系部活動で培った気合いと根性は、夜通しの勉強を支える原動力となり、朝方、窓から差し込む光を見ては、眠気との戦いに勝ったことへの勝利宣言で達成感を味わっていました。



勉強方法と言え、ドリルを使って英単語や漢字を何度も書いて覚えました。漢字でいっぱいになったノートを見ては、「今日も勉強したなあ！」と満足感に浸りました。

しかし、労力の割には、定期考査や模試での成果が今一つで、伸び悩みました。先生からはレポート提出時に、「漢字をもっと使って書きなさい」とよく注意を受けたのを思い出します。

これだけ猛勉強したんだからきっと大丈夫、そう信じた受験でもありましたが、志望する大学の合格切符を手にはできませんでした。今思うと、模試やテストで書いている漢字や単語も、一時の記憶として有効ではありましたが、私自身の語彙力としては身に付いていなかったのでしょうか。

あれから40年、私が過ごした高校生活とは似ても似つかない世の中へと様変わりしました。板書された文字を一字一句間違えずにノートへ書き写し、先生の説明に耳を傾け、与えられた課題に取り組む生徒の姿は、ごく普通の授業風景でしたが、今では、参考書がタブレットに代わり、分厚い辞書を持ち歩く必要がなくなる中、先生が1から10までのすべてを説明するのではなく、先生のヒントを基に複数の生徒で話し合い、お互いに考えを説明したり、他の根拠と関連付けたりする学びのスタイルへと変わってきました。

例えば、なぜ、ペリー提督は1853年に日本へ来たのでしょうか。1852年や1854年ではなぜダメだったのでしょうか。実はこの年、イギリス、フランスなどヨーロッパ諸国とロシアとの戦争が勃発したため、アメリカにとってはこの機会を逃すわけにはいかなかったのでしょうか。このように、一つの知識は、他の記憶のかたまりと重複していることが多いので、生徒同士での話し合いを活用し、必要な情報を効率よく思い出させ、知識と知識を紐付けていきます。すなわち、興味や疑問の幅を広げ、違う視点にフォーカスすることで「理解」が「納得」へと変わって記憶されていきます。

私も高校生の時に、何度も書いて覚えた漢字を、感想文や論文、レポートの提出で活用できる機会が日常的にあれば、漢字が文章の中で他の表現と紐づけされ、語彙力として発揮できたかもしれません。

■令和6年1月、年が明け、あらたな気持ちで学校生活が始まる中、各教室を覗いてみると、生徒の賑やかな声が聞こえました。それは、私語ではなく、先生が伝えたヒントを頼りに生徒同士で話し合い、教え合っている姿でした。「そうそう！」「だからね」「このことと関係あるよね」「これは違うよね」

「あ、分かった！」自分の考えや疑問を仲間に説明する声は、教室だけではなく廊下にも溢れ、学びの匂いとなって学校中を包んでいました。

令和6年1月

